

—ただキリストと共に歩む—

# 水戸無教會

第5号

編集 半田梅雄

人類をして肉の

飢えを満たさしめよ

半田梅雄

最もよき師はその友にあら  
ず、彼の正面にある敵であ  
る。今やキリスト者が直面す  
る好敵手はマルキシズムであ  
る。マルキシズムの果すべき  
世界的役割は無神論による

徹底的現世主義である。飢え  
る者を一人も地上より出すま  
いとすする非凡なるヒューマニ  
テイが彼の理想であり、彼の  
最も得意とする武器である。

この徹底的なる現世主義は、  
何人も反抗することを許さな  
い人間存在の根基の如くに見  
える。然り彼はとうとうたる  
濁流の如く全世界を呑み盡さ  
んとしている。それは決して  
一ソ連、一中国の中の、極く  
少数者の野望の如きものでは  
ない。その施策、その方法に

若干の相違はあつても、よし  
又権力相奪戦によつて指導者  
交代が行われてもそれが直ち  
にマルキシズムの現世主義を  
揺ぶり倒すものでないことは  
明らかである。

何人も飢えることを欲し  
ない。何人も圧迫され、逆  
いたげられることを欲しな  
い。この逞しい人間の基本  
的欲求を満たすものである限  
り、全世界の原水爆を同時  
に彼らの頭上に爆発すると  
威嚇しても、マルキシズム  
の進軍は益々熾烈に、愈々  
果敢に押し進められるであ  
らう。

人類は進みつゝある。そ  
の目指す方向はしかと認識  
することは出来なくとも、  
何れにしても或方向にその

おびたゞしい犠牲を乗り越  
え乗り越え進軍しつゝあ  
る。彼らは飢えたる狼の如  
く凄まじい咆哮をあげつゝ  
前進する。アメリカの富の  
如きは忽ちにして食い散ら  
さるべき運命にあることは  
火を見るより明らかであ  
る。彼らは飢えている。彼  
らは肉に於て飢えている。  
決して霊と魂に飢えている  
のではない。飢えたる者に  
先ず飢えを満たさしめよ。  
然して次に来るべき我らの  
使命の重大さに凜然とせ  
よ。人は遂に狼では終り得  
ない。必ず終りの日は来る  
であらう。かの日まで与え  
られたる尊き使命を完うす  
る者は極めて少数である  
う。されど神は必ず必要  
なる七千人を残し置くであ  
らう。その日の栄光を思うて  
我らの胸ははり裂けんばか  
りである。

# 人の生くるは肉のパンに非ず

松本文助

人間は二十の扉の云う如く動物である。文明の進歩は驚くべきものがあるが、文明が進み科学が進歩すればする程、人間の方は猛獣同志のように段々と獍猛になるような感じがする。然しこのような社会で其の人を指して馬鹿野郎とか、畜生とか云うものならそれこそ大事件である。名誉毀損になったり、議会でもあれば総理大臣は陳謝し、その上野蕃人扱いにされ、新聞の特種子になるのである。「神もなければ道徳もない、愛国心もなく、国民としての誇もなく、義理も人情もない」(聖書知識六月号「抜けた釘」)こんな人間なのに何故腹が立つのか

しらと考えさせられる。科学的説明でもなければ承知出来ない現代人が人間の起元を探すならば、何も腹の立つ理由はないと思うが、科学的な人であればある程はげしく怒るようである。

このような矛盾は、人間には動物と違った霊的なものが働いて、無意識の中に人間の尊厳とか、人格とかを振り廻すからではあるまいか。

私共が少しく眞面目な態度で創世記々者の「神其の像の如くに人を創造たまへり」(創世記一の二七)エホバ神土の塵を以て人を造り生氣(いのちのいき)を其の鼻に吹入たまへり人即ち生靈(いけるもの)とな

りぬ」(創世記二の七)に耳を傾けてみよう。何と心にぴたりとするではないか。人が神の像の如く創造られ、神の生氣を吹き入れた生靈が、人間であるというのである。この言に始はじめて人間が動物視される事に侮辱を感じるのである。腹の立つ理由も、人間の尊厳さも、人格も平等も、動物と違った存在も画然とされるのではあるまいか。今より二千年前クリスト・イエスこそ、神よりの眞理の御霊であり、私達の中に居給うて(ヨハネ一四の一七)人が霊的存在であることを示され、また実証せられたのである。

クリスト・イエスは全く生靈の糧として私達に生命を与え給うたのである。二千年の歴史はクリストを受くると受けざるに依って其の国の興亡を示し、其の民族の消長を示しているのである。見よ当時のローマ大帝国は今何処にあるか、

そして何もなき大工の子イエス・クリストが今や全世界を支配している事実を。

而してまたとるに足らないと小さき私共でも、若しこの動物的存在のあやまりであることを悔い、謙虚な心をもつてクリスト・イエスを信ずるならば、実に驚くべき大変化が起るのである。平安は心に満ち、飲菀は溢れ、希望は湧き、永遠の生命を得、死は天国への門出となる。この恩恵こそ全世界をもうくともその比でなくなるのである。実にクリストこそは生命のパンであつて、このパンを食うて永遠に生きることが出来るのである。肉のパンは食いても必ず死を来たらずのである。(ヨハネ六の五七、五八)

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」(マタイ四の四)

## 一二つのエルサレム（ガラテヤ四・二二―五・一）

石原秀志

肉の子はシナイ山＝エルサレムの生む所であつた。

モーセの律法がシナイ山に於て与えられた事と、エルサレムの神殿が律法の中心としてユダヤ人の間に特別な位置を占めた事とは凡て肉の行為によつて神の前に義たらんとする者にとつて最高の権威をもつ歴史的事実であつた。此の肉の行為に生きる者＝肉の子の存在理由は正しくシナイ山＝エルサレムに発しているのである。彼は母なるエルサレムと共に奴隷である。之に對して約束の子とは上なる

エルサレムを母としてもつ者であるとパウロは言う。彼女は自主である。自由である。従つて自由なる者より生れた約束の子も亦自由である。

シナイ山より出たエルサレムは奴隷として現れ、そしてその生む所の子等と共に今も尚奴隷たるの位置より解放されない。何故ならば彼女とその子との主人は人間の自由を最も本質的な意味で束縛する律法そのものであるから。

然し乍ら上なるエルサレム、新しいエルサレムはそうではない。彼女は旧き律

法の支配より全く解放され、唯キリスト・イエスの福音が凡てとなつた「新しい創造」として出現せしめられたのである。此のキリスト・イエスにある「新しい創造」を経験する事によつて新しいエルサレムの子とせられた者にとつては最早や旧き奴隷的支配が何等の権力をもたない完全な自由が保証されている。「キリストは自由を得させん為に我等を積み放ちたまへり」

×

肉の子は誇り、約束の子を責める。約束の子に何が出来るというのか。見よ、彼は何等の善き事をなし得ず、何等の力をもたないではないかと。之に對して

約束の子は沈黙する。事實彼には誇る所なく、躓きと汚れと、弱きとに満ちていることを知っているから。けれども唯沈黙するのではない。彼の衷なる眼は上に向けられ、衷なる叫びは天に向けられる。そしてその度に天的なる平安が彼の心を慰め、励す。曰く「わが恵汝に足れり、我が恵は弱き中に全うされる」と。

×

やがて日が来るであろう。その時「婢女とその子とを逐い出せ、婢女の子は自主の女の子と共に業を嗣ぐべからず」と言う厳たる御声が響く。

# 神学について

大森 孝 夫

私の尊敬している無教会キリスト者に向って「あなたの信仰は神学的に見て危険だ」と断定する牧師の言を、先だつてきいたことがあります。私は神学の素養がありませんが神学は教会の宣教に奉仕し絶対的な啓示の眞理を指示するため、の学問であるときかされてきました。然しその神学的、理論的考察からなされる教義の絶対性を誇り、それを以て他を審くための学問であるとは教えられませんでした。私はカトリック神学に非ずしてプロテスタント神学であるならば神学の限界性をよく認識し、決して審判者となる筈はないと思います。またある牧師は

「無教会主義は聖書を重んじ福音主義を強調しつつも、その拠つて立つ思想的根拠を明らかにする事をなし得ず、又そうすることを強いて好まなかつたために神学蔑視の傾向に堕したわけである」と一文を草しておりますが（現代宗教講座第三卷一九七頁）私自身としては何も無教会が神学を軽視しようと思意的に努力している訳ではないと思ひます。勿論最近の神学論の傾向とか論争といったものには無知であるかも知れませんが、キリスト教の重大な教理の歴史やその長所短所等の理解をもつことは十分に必要であることを知り、種々努力研究しておる

と思ひます。なぜなら無教会は盲信家の集りでも狂信家のグループでもないからです。神学の存在意義を私たちはよく認めています。たゞ無教会の人たちは信仰の説明書、能書よりも生きた、実験の信仰にすべてをおいているのです。キリスト教は神学であり、神学なき者に正しき信仰はあり得ない、つまり「神学イコール信仰」と考える人達とは全く反対なのです。信仰は生命です。組織されたり定義することはできません。私たちは聖書を学びますが、神学論を形成するためにはしているのでありません。ヨブ記を学んだ私たちは神学では救われなことを十分に知りました。余白が少なくなりまして。もう一度くり返しました。神学に必要なや利点があ

ることは認めますが、教会と違つて無教会は神学という土台石がなければ駄目だとは毛頭思つておらない。無教会に必要なものは唯一つ、生ける実験の信仰そのみであるということですから。これ一つですべては磐石だと私たちは思うのです。もし神学がないから無教会は正しい信仰がない、基礎がない、駄目なんだという説が正しいならば、無教会はとつくに死んでゐる筈であります。ともあれ、宗教を持たぬ人から「宗教の危険は神学にある」（評論家小林秀雄）という発言がなされておることに私達は着目し教会者（神学者）も無教会者も互に神に在りて謙虚にし、すべては聖旨のために十字架目指してたえず戦い続けて行くべきであらうと信じて止みません。

# 偶像

半田信子

「偶像」という語を辞書にみたら、「天地の造物主である唯一の神に帰すべき礼拝を受くる眞神以外のものを偶像という」とあつた。「私はイエス様を信じていますから偶像なんか拝みません」という人は多いけれど、本当にそういゝ切れる人はどの位いるのだろうか。日本には昔から人の手で作られた神様が多い。至るところに、小さなほこらやお宮をみかける。「あれは偶像ですよ、あんな偶像を拝むのは罪ですよ、イエス様を信じなさい」そういう人が多いいけれど・・・。

目に見え、手にてさわられるものをきらう人は居ても、心の中にひそむ自分の偶像崇拝に、気づかぬ人も又多いのではないだろうか。形あるものにとらわれて、「佛壇を拝むのは良いか悪いか、お線香をあげるのは」など、討議はしても、形にあらわれない偶像の方が却つて恐ろしく力のあるものだという事に気づかぬ人が・・・。金銭、名誉、地位、事業、快楽、知識、愛する人・・・。イエス様よりも大切なものが多くて、イエス様に入って頂く事も出来ない程に、心の中

がつまつてはいないだろうか。一生懸命教会へ通つても、欠かさず礼拝に出席しても、牧師がすばらしいからという先生信者、教会堂が立派だからという教会信者や讚美歌が美しくくて好きだからという讚美歌信者であつては、イワシの頭を拝む人と同じで、他人の事は笑えない。神様第一なのだからと気をゆるしている中に何時の間にか、神様はそつちのけで気をついた時には、大事な信仰さえも消えかゝつていたというような、恥づかしい経験を持つた私は目に見ゆる偶像よりも、形にあらわれない心の中の偶像の方がどんなに、おそろしいものであるかと心に強く思うのである。い

くら偉そうな事を云つて力んでみても、より頼むものが此の世のものであつては、砂の上に建てられた家と同じでくずれ倒れるのは当たり前である。マルタがもてなしのことも多く心いりみだれていた時に、マリヤのみはイエスの足下に座して御言をきいていた様に、世につける思いを離れて、謙虚な念いをもつてキリストのみことばをきゝ、そして従いゆくものでありたい。

若子よ自ら守りて

偶像に遠ざれ

(約一の一五・二二)

## 石原兵永先生講演筆記

### 生けるキリストの信仰

パウロは辛うじて「貴方は誰ですか」と訊ねた。そして神の光の中に生きたまうものがキリストであることを知った。かくて砕かれた魂に生けるキリストが現われ、彼に救いを与えたのである。

ちようど内村先生が札幌農学校の生徒として入学当時、異端邪教としてキリスト教に激しい敵意を持たれたのと酷似している。キリスト教に回心してから後も先生は永い間自己の罪について苦しんだ。ついにアマスト大学にあつた時、ある日十字架上のイエスを仰ぎみる恩恵をあたえられて、

まことの救いにあずかつたのである。生けるキリストが先生の心の空に現われて、かれの魂をよみがえらせたのであつた。

ふりかえってみれば戦慄すべき罪のおびただしい残骸、すべての人間の悪の為に、否おのれの恐るべき罪の為にイエスは十字架につけられた。血潮の滴る十字架を仰ぎみるとき誰か打伏しに打倒されないものがあるか。死んで墓場に朽ちはてたイエスに頑固なパウロを作り変える力はない。パウロも内村先生も復活のイエス、生けるキリストの力によって作り変られた。

それは地上のすべてをよせ集めても人の力はよくこれを為すことが出来ない。それは徹頭徹尾人の業ではない。十字架の死より復活せるキリスト、生けるキリストに於て示された神の力である。

「父は我らを暗黒の権威より救い出して、その愛しみ給う御子の国に遷したまへり、我らは御子によりて贖罪、すなはち罪の赦を得るなり（コロサイ書一ノ十三〜十四）。神の愛し給う御子の国、即ち今まで暗黒の世界に悩んでいた人類を光の国、神の国そして父とみ子の国に移し給う神の愛こそ偉大である。ここにクリスチャンの生活は始めて

恩恵より恩恵へ  
救いより救いへ  
信仰より信仰へ

日々平安とよろこびに満たされた連続となることが出来るのである。（了）

○信仰は自信ではない。おのれのすべてを神のみ手にゆだねた者のやすらぎとよろこびである。

○祈りは願望の成就を希求することではない。むしろ私の願望の一切から解き放たれる為に神の力に依頼むことである。

○長き祈りが立派なのではない。「神様」とたつた一言しか口に出来ないような者の祈りを神はよろこび給うであろう。

○短かき祈りが常にたゞしいとは云えない。飯を食べながら新聞を見ているような祈りもある。（半田）

# 教派と正統論について

半田 梅雄

キリスト教に多くの教派がある。どれが真でどれが偽、どれが優れてどれが劣るか、誰にも判定はつかない。既に何れかに属している人たちは、自派をもつて最も正しく、優れていると認めている。もし何れにも属せぬ人が、すべての教派の発生源にまでさかのぼって、その真偽優劣を比較研究して然るのちに、何れかに定めようとするなら、彼は遂に自分の一生の余りに短かく終ることを嘆くに至るだろう。では我々はたゞ適當なる判断をもつて何れかに属するか、或はわからぬまま、問題を放棄してしまふか、その二つの

中の一つを選ぶ自由しか持たないのだろうか。

教派の発生は、起源的に云えばキリスト者の独立と自由に関係している重要な問題である。何故なら多くの教派の祖述者たちは、現実の支配的教派に対して始めはその拘束から脱れる為に立ち上つたのであり、本質的には教派の否定者として、一人のクリスト者が存在し得ることを明らかにしたのである。勿論彼一人丈では教派は形成されない。教派が歴史的産物である以上当然これを維持し存続せしめる器が必要である。即ち祖述者の弟子であり、後継者がそれである。教祖と亜

流（エピゴーネン）、これが教派存続の実態である。凡そキリスト教にあつて「私が正統だ」「私が正しい」と主張する位馬鹿げたことは無い。正統という意味には明らかに年代付の血統証を他に比較して誇るものが含まれて居り、それは神を知らないこの世の子らが最も珍重するものなのである。キリスト者には道統とか、家柄とか、血すぢというものは無い。何故なら一度キリストによつて神に召されたものは既に歴史を超えてしまつているからである。永遠に生きるということとは、これから未来に向つて永遠に生きるというばかりでなく、同時に無限の過去から神と共に生き通して来たという確たる自覚に立つことである。従つてキリスト者は歴史的に五十

年の肉体を生きながら、魂にあつて明らかに歴史を超えて神の子である。キリスト者はイエスの二千年後の又弟子ではなく、一九五五年の今日も生きているキリストの直弟子であり、キリストが我がうちに住み、我々を支配し給うこの事実が、我々をキリスト者とする証明であつて、それ以外に証明はないし、必要もない。だからキリスト者に派があるとすればイエス派のみであり、他と比較して我が派を正統とすること自体この世的立場をとるものであつて、三文の価値もないものにイエスを売り、そして誇つている証拠である。救いには他を省みたり、比較したりする余猶はない。ただ救つてくれる唯一人がすべてである。

始めに述べたように、教派の否定者として現われた一人のキリスト者が、多くの亜流にかつがれ出すと忽ち教祖の地位にまつり上げられるのは何故であろうか。それは彼と最初の一、二代の弟子たちは確かにキリストより新生命を与えられて居り、伝道にしろ反抗にしろ、礼拝にしろ生活様式にしろ、固執したり、縛られたりする悪い意味の伝統は一つも持たないので全く自由で生々して居り、何よりも彼らを眠らせてしまふことのない前面の強大な敵が、彼らを常に純粹にキリスト丈に頼らせる鞭になつていたが、三代目位になると初代の人々の純粹で果敢なたゞかいによつて何時の間にか彼らのグループは多数派になつてしまつてゐる。こゝに腐敗と墮落の

因果關係が果てしなく綴られてゆくのである。まず伝道者の職業化、次に信者の学校教育、そして慈善、社会事業、この辺から政治、経済、文化面との接觸結合は当然過ぎる帰結である。かゝる宗教が地の塩である筈がない。彼らの支配者はキリストではなく全く此の世の法則であり、この世の勢力に外ならぬ。だからこそその内に大量の偽信者、偽教師を養成する結果となるのである。

要するに率直に云つて教派は全然無用のものであり、いわゆる正統派は存在しないということである。救いはたゞ神のみこころによるのであり、教派の色別けがこれを決定するのではない。眞の救いにあずかつた者には十字架を仰ぎみる感謝の涙と嗚咽があるばか

りである。導くものも与えるものもすべて神のみであり、神はこの世の智慧と組織を必要とし給わないのである。

## 後記

今月は期せずして活きのよい原稿が集まつた。理由はわからない、唯強いて云えばポツポツ風当りが強くなつたことである。『神学的裏付けがない』とか『聖書研究のグループでしかない』とかとまれよき批判者を持つ事は最大の恩恵であると思ふ。

山田鉄道先生から一人一人に実に有難いお便りと、無教会キリスト誌を頂いた。幼稚園生にもわかる易しい表現で十字架の眞理を

語り続ける先生の御使命はこよなく尊い。

夏季講習会迄残すところ六日となつた。『神様、黒崎先生の上に御恵みを豊にお与え下さい。』

半田信子さんが盲腸手術で入院されたが経過頗る順調、講習会に参加出来る由、感謝。

(半田)

昭和三十年七月 発行

水戸無教会第五号

実費十円千共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園内

水戸無教会